

歴史は、国家間の相互理解を促進するか

永安 幸正

目次

- (五) 物の見方の枠組みを転回する
〈補論〉日本は外交手法の革新を
- (六) 報恩と贖罪の実行とは
- (七) 反搾取と正義の交渉を行う
〈資料〉尖閣諸島の領有権についての基本見解（日本政府）
- (八) 各国は謙虚な自律史観を確立すべし
- (九) 歴史観のホコリを払う

キーワード…対話、説明責任、理念、大東亜共同宣言、贖罪、歴史観のホコリ

(五) 物の見方の枠組みを転回する

ここで、日本が国際情勢の認識において落し穴にはまったという事実の一端を示しておこう。

大正から昭和一〇年代という時代は、外交と戦争において「物の見方がいかに大切か」を学ぶ上で、数多くの教訓を含んでいる。この時ほど、のるか反るかのみか、いかに決断を迫られたことは、おそらく日本の長い歴史において、他にはあるまい。十三世紀の蒙古襲来はじめ、明治維新のときも外国からの攻勢と策動は危険なものであったが、大正と昭和の時期はそれどころではなかったろう。

ところが、この時期に日本は取り返しのつかない見損じを犯したのだと、私は思う。それはどんな見損じであったか。フランスの位置付けである。

当時、陸軍の広報を扱う陸軍省新聞班というところから、有名なパンフレット類が幾つも出ているが、その一つに、一九二〇年代、三〇年代における日本の経済力の台頭と、それに対する列国の反感とを引き比べて見事に分析した報告書がある。題して『躍進日本と列強の重圧』（昭和九年）がそれである。現代から見ても、なかなか優れた内容のものと言える。

これを読めば、時は世界大恐慌期でもあり、貿易など日本の経済的進出が、いかに欧米植民地帝国に脅威となっていたかが、データと、海外の政治家の発言、新聞の報道などから、明瞭につかめ、現代でも有益である。現代の日本国民もこれを直に読むとよい。

冷静に読んでいけば、この中に、「フランスの独特の位置と役割」が、浮かびあがってくる。すなわち、当時の日本の外交・軍事戦略の基本枠組みは、舞台は東アジア大陸と東南アジアの諸国、そこで二つの勢力に対処することにその狙いがあった。一つは北方のソ連、今一つはユーラシア大陸の南と東から日本と利害を争っていた欧米。

だが、われわれ日本人は、欧米というとき、そこには、利害がすぐさま共通する英米と、利害が英米と一致せずに張り合っていたフランスが含まれることを無視して、欧米といって味噌も糞も一緒くたにする傾向がある。この明治以来の悪しき心情が、昭和期に災いしたといえまいか。

その頃のフランスは、日本の台頭にもあまり警戒感を見せておらず、むしろ日本の行動に理解を示していたのである。少なくとも、陸軍による世界についての現状分析は、イギリス及びアメリカの国益・外交とフランスの国益・外交との間の不一致を、えぐり出していた。むろん、この点を新聞班の人々がどこまでしっかり意識して書いていたか、どうかは不明であるが……。

ところが、日本は石油その他の資源欲しさに、いきなり南方——東南アジア——に進出する。しかも、なんと仏印と呼ばれたインドシナ、つまり今のベトナム、ラオス、カンボジアというフランス植民地から占領を始める。日本を理解する可能性のあったフランス地域を、まず攻撃したのである。フランスが英米と同調するようになるのは、火を見るより、明らかであった。

おまけに、日本の松岡外相は、思慮まことに浅く、歴史上フランスにとって最も憎き宿敵であるドイツ

と——イタリアを加えて——三國同盟を結んで帰ってきた。フランスは、日本理解を帳消しにして、英米連合国側についた。

近代の世界史は、文明論的にいって、英米と、フランスと、両方の陣営が対立軸となりながら動いて行く——加えて、ロシアはドイツと対立しつつ、フランスと同調しやすい。故に日本は、英米と、フランスとを、決して同時に敵に回してはならない。この鉄則を日本は忘れてはならなかった。

こうして、日本は英米仏という相手側の、後の連合国側の、利害を一致させる愚を犯したのである。連合国を作らせてしまったのだ。もし、陸海軍がインドシナを攻撃せず、マレー（英領）とインドネシア（蘭領）のみに進出していれば、事態は変わっていた可能性がある。

これは、「西洋と東洋という二分法」で世界を色分けし、西欧の内部の差異に目を覆うものであり、明治以来の日本人を虜にしてきた底の浅い世界認識からくるものである。

もう一つ、この陸軍パンフレットが、図らずも後世のわれわれに残している教訓がある。「かつてのドイツの轍を踏むな」という警告がそれである。

ドイツは第一次大戦を引き起こして大敗し、国民は塗炭の苦しみを嘗めた。ヒトラー出現の理由の一半はそれにあるわけだが、「陸軍パンフレット」はドイツ失敗の理由を列挙し、当時の日本がドイツと同じ事態

に突入する恐れがあると分析し、それを避けるべし、と警告していた。なんと、陸軍が、である。題して「独国失敗の原因」（八九〜九二ページ）。

原文は漢字が多くて難しいから、現代文にして要約し紹介しよう。以下の如し。

- 一、ドイツは、世界を納得させるに足る正義に基づいた国是を有しなかった。
- 二、ドイツは、強国に取り囲まれ、経済戦を有利に運ぶための地理的条件を欠いた。
- 三、国防的にも、四周に強国を配し、不利であった。
- 四、外交戦略を誤り、孤立に陥った。
- 五、宣伝戦が不十分であった。
- 六、自己の実力を過信した。
- 七、一般の情勢判断、英米の参戦を予想しなかった。
- 八、無制限の潜水艦戦を始めるなど、作戦を誤った。
- 九、戦争前のイギリスとフランスとの不仲を利用する政策を欠いた。
- 十、国内に反国家勢力を抱え、国民の統一が乱れていた。

この分析のすぐ後、一九三〇年代末から、日本は、第一次大戦前のこうしたドイツの「わだち」を、忠実になぞって行くのである。そして完敗したのであった。何たることか。

後の世代の者として、このパンフレットは何のための研究であり分析であったのか、と惜しまざるを得な

い。歴史から教訓を学ば（べ）なくなれば、国であれ、会社であれ、家であれ、個人であれ、待ち受けている命運は云うも更なり……。

欧米中心の世界秩序をアジアから排除するための方法に、日本は今一つ細心の注意が足りなかった。

この点で、世論形成に重要な役割を負う日本の思想家、文化人、ジャーナリズムの責任も大きい。彼らが、もつと世界史に目を開き、世界史から学ぶべきだった。日本の世論は、情報の偏りのまま、海外飛躍を妄想し熱狂していた。その世論を沈静させ、朝野の自信過剰、独善主義を回避できたはずであろう。

省みるに、共栄圏というように、そもそも異なる民族、異なる文化が共存するには、三つの条件が必要となる。すなわち、

- ① 共通文明を広めること（共通性）。
- ② 共通の法体系を構築すること（共通性）。
- ③ 異なる文化価値の存在を認めること（個性と多様性）。

第一に、共通文明とは、主に科学技術をその基礎とした物質的システムであり、熱帯か温帯か、乾燥地帯かモンスーン地帯か、という異なる風土毎に、姿形は異なるが、原理はどこにも当てはまる共通普遍のシステムである。

そして第二に、地球上、各国の資源賦存は不平等であるから、各国は公平な法体系を構築し、それを基に

して自由公正な交易を促進し、有無相通うむあいつうじるようにする。

第三に、各国、各民族は従来から存在する異なった宗教や信条を認め合うのである。

この三重の原理は、これから二十一世紀の日本が世界に伍ごして行くときにも、有効な指針ではないだろうか。

右は、実は古代ローマにおいて、ジュリアス・シーザーなどが構築しようとした世界国家、ローマ帝国の構成原理であったのであり、そこでは、曲がりなりにも高度の科学技術を背景とし、万国に通じる法体系をもち、多神教も認められたのである。この宗教についての点は、のちにローマで一神教のキリスト教が国教ききょうとされ、多神教の伝統は廃すたるが、ともかく帝国全体の共通普遍性と、各地、各人の特殊個性との、絶妙ぜつみょうな結合があった。

日本がこのような「誰にも受けいれやすい構成原理」に気づき、謙虚けんきよに、正義と愛とからなる精神の実践に邁進まいしんしていたならば、と惜おしみても余りある。

古代ローマに始まった万国法ばんこくほうの発想が、満州国から大東亜共栄圏にかけての日本の構想には、不可欠であったのではないか。

満州建国時の皇帝溥儀ふぎの実際の言行げんじやうから推し測はかると、満州国では日本が国造りくにづくの方式を一方的に強制したものでなかった、皇帝溥儀の意志いしが貫つらぬいていた——東京裁判では彼はソ連側証人となり、本心を証言しなかった——ということが事実である。

また、満州国の「五族協和」という理念を掲げて、人材を育てるために創設されたのが「満州建国大学」であったが、その理念について、誠心誠意、実際に学生に講義した貴重な記録が残っている。副総長・作田壯一博士口述、山田昌治編『分かれ身の構築』を参照されたい。(新編版「終身道徳」の講義録、平成二年、明星印刷、大分市田室町三―三六、電話〇九七五―四五―五四八九)

満州の建国大学は、厳しい包圍網の中において日本主導で行われた試みではあるが、多民族からなる国際的な学び舎の建設であり、その記憶と記録は、温故知新として参照されるべきであろう。外にも、「合作社」造りなど、開拓団の記録もある。――これは中国共産党に受け継がれたともいう。

一九四五年八月に日本が戦争に敗れてからは、日本の行ったことは悉く失敗であり百パーセント「悪いこと」であったから、というので消し去ったり封印したりする傾向があるが、それでは歴史の抹殺であり、歴史から学ばない態度であろう。むしろ、日本の言動も外国の言動も、「当時の現物そのもの」を実際に読み、調査し、検討することが必要ではないか。

過去の歴史に目を閉じるものは、将来の歴史において、後悔に涙することになろう。

結局、人類の歴史を長い目で見れば、失敗は成功の本である。逆に、成功は失敗の本にもなる。禍福あざなえる縄のごとし。歴史の因果律は、そうした失敗と犠牲を無にしなかった。あの戦争の結果、さしもの非

道な欧米植民地も消滅に向かい、日本も元の四つの小島に戻り、新たな歴史を始めることができた。われわれは、少しも自虐に陥る必要はない。

われわれは悟った。日本の国内理念には日本の個性を確保しつつ、しかし、国際関係の理念は他の国民にも通じる分かりやすい共通価値でなければならぬ、と。

二十世紀の一大事件である戦争からのこの教訓は、今後の人類の将来に、東アジア地域、東南アジア、日本の将来に、ともに有益であるだろう、否、積極的に有益たらしめねばならない。

〈補論〉日本は外交手法の革新を

世に、「敵を知り、己を知り、（変に應ずれば）、百戦これ危うからず」などともいわれる。孫子の兵法なのであろうか。

中国から近年出版の『孫子兵法 孫濱兵法』(Sun Zi: The Art of War, Sun Bin: The Art of War, 1996, 2nd ed. 中国国際図書出版公司) は版を重ねているが、そこには「故ニ曰ク、彼ヲ知り、己ヲ知ル者ハ、百戦殆フカラズ」(第三部付録、十四ページ)と出ている。日本の武士道と同様、『孫子』でも、会社の経営に参考になるといふ評価は昔から存在する。最近では、中国の経済発展につれて、その価値が称賛されているが、はたして国家の戦略にとってはどうであろうか。

この文句だけであると、中身は全く無内容なのではないか。この呪文をいくら繰り返し唱えても、スポー

ツの国際試合に勝てるものではなく、ビジネスの世界競争に勝利するものでもなからう。まして、外交や戦争に勝てるものでもなからう。

日本の外交戦略論には、一貫して、どこか欠陥があると思えるが、それがこの兵法の捉え方にも現れているのではないだろうか。それは「個の発想」であり、一騎打ちの考え方ではないか。

(i) 一騎打ちの戦法を超えるべし

松尾芭蕉に、二句ある。

「ふるいけや かわずとびこむ みずのおと」
 「しづけさや いわにしみいる せみのこえ」

さて、飛び込む蛙は、何匹であったのか。岩に染み入る蟬の声は、一匹の声であったのか。

日本人に感想を聞くと、「ひとつ、一匹、一羽」という返答が多いということになっているそうである。

二昔前、俳句を英語で外国に紹介する専門家に尋ねると、そうお答えになられた。

日本人は、個が確立せず、集団主義 (groupism) の国民だと批判されるのに、案外一人がお好き、孤独がお好きな民族であるようだ。個の不確立と孤独好きとは両立するのだろうか。『五輪書』を著したあの剣豪・宮本武蔵(一五八四頃?～一六四五)は、自分の道を「独行道」とも名づけた。北太平洋では船団を組

まないで操業し、魚を獲る「独行船」と呼ばれる日本の漁船も活躍する。

日本では、そこから、人と人との関係でも「一対一」に設定しがちではないか。ゆえに戦いも「一騎打ちの論理」にはまる、という傾向があるのではないか。

馬に乗って海に乗り入れ、沖に待つ味方の船に追いつこうとする年若い平敦盛（一一六九～八四）を呼び止めた源氏方の武将・熊谷次郎直實（一一四一～一二〇八）は、浜に返してきた敦盛と一騎打ちを行い、首を撥ねた。それを一生悔いて出家し、敦盛の菩薩を弔ったという。典型的な一騎打ちの美談ではないか。

アメリカの武士道はカウボーイの精神である。西部劇に出てくるカウボーイにも、もちろん、ガンマンとしての一騎打ちの美学がなくはない。が、国際外交や戦争は大部分、一対一の関係ではないし、一対一にしてはならない。

なのに、日本には、「集団安全保障は不可」という頑迷固陋の思想がある。

英国のサッチャー首相が、瞬間に武力に訴えて解決した「フォークランド紛争」（アルゼンチン沖）は、戦闘はアルゼンチンとの一騎打ちであったが、世界に向けてイギリスの正当性を素早く宣伝し、理解者を得たので、ほとんど侵略というふうには批判されなかったと思う。外交には宣伝工作も不可欠である。

日本であったなら、そういう事をせず、ガラガラと紛争が長引いていたであろう。竹島問題の姿がそれではないか。

日本では、日本と中国、日本と韓国というように、一対一の関係を前提にする。東アジア大陸で北朝鮮の核問題を協議する六カ国協議の場では、一対一の関係ではないのに、そこに日本は「拉致問題という日本と北朝鮮との間の一対一の関係での問題」を持ち出す。これは奥歯に物の挟まったようなもので、初めから成功しない、場違いの問題設定ではないだろうか。

せめて、人権問題とテロ問題ということを通の課題とする舞台設定なら、結果も違っているであろうが、人権を主題とするときには、中国は自分の国の人権問題がつかれるので、参加しないであろう。

ともかく、日本は、一対一とまらない関係を作ることである。

孫子の兵法では、一対一の一騎打ちの場合もあるが、むしろそうでない「三角の戦略関係」を作ることが戦略の前提となっている。つまり、本来の敵に対し、「敵の敵」を作ってそれを味方とし、その味方に「敵を牽制してもらおう」という戦略である。

中華民国の弱体な国民党政権を率いる蒋介石（一八八七～一九七五）は、一九三〇年代に、抗日のために英米の支援を引き入れ、それを日本との戦争に利用した。日本という主敵に、英米を引き入れ、日本に対する新たな敵を作り日本を牽制させた。英米はかつて、日露戦争で日本に味方し、日本を支援した国なのである。

あるいは、その頃台頭しつつあった中国共産党。甚だ弱体であったが、毛沢東（一八九三～一九七六）

は、一方で国内の主たる敵（主要矛盾の関係）である国民党との間に、一旦は国共合作（国民党と共産党との協力体制）を構築して、日本を共通の敵とし、民衆を統一して決起させた。見事な兵法ではないか。

その前に、清国を倒したのは孫文（一八六六―一九二五）だが、その後を襲った袁世凱（一八五九―一九一六）には、なかなかの戦略があったようである。つまり日本は、「対支二十一箇条」（一九一五）を要求したが、袁世凱はそれを内々受け入れ、引き換えに多額の援助を日本から引き出そうとしたのだが、それを暴露して抗日運動に利用し、日本側が全くしてやられた、といういきさつがあったのではないか（深堀道義『中国の対日政戦略』原書房、五四―五八ページ）。再度研究してみるべきポイントであろう。

他方、蒋介石は、日本という敵に対して戦うのに「英米を引き込んで国民党への支援」を取り付け、日本が太平洋戦争で英米に敗れたから――東アジアでは日本は泥沼にはまったが、敗れてはいなかった――大陸では共産党が「蒋介石という間接のルート」で英米戦力を利用し、日本と戦う結果となった。後年、毛沢東は、日本が大陸で戦争をしてくれたことが、共産党が政権を握る上で役立ったと、感謝の意を表しているそうだ。

日本は、直接には英米に負けたのであって、国民党や共産党に負けたのではない。共産党は日本軍からは逃げ回ってばかりいたという。敵に背を見せた。否、一目散に逃げ回って姿を見せなかった。逃げるが勝ちであった。

毛沢東の戦略は「戦わずして勝つ」という戦法の見事な応用ではないだろうか。中国共産党は、この複雑な戦略関係を、しぶとく運び、勝利を収めた（毛沢東『矛盾論』『実践論』『持久戦論』などに基本思考が見られる）。今の中国共産党と北京政府にも、粗野であるが、そういう戦略思考が見え隠れする。

日本では、「戦わずして勝つ」というと、

① 武力を使わない。

② 知恵を使う。

③ 平和的方法を用いる。

などという意味だけに受け取りやすい。敵の敵を作る、そして戦いをさせる、という考えに至らない。

これは平和主義を好む日本人気質に合う。古来の教えが「和を以て貴しとなす」（聖徳太子）であるからか。

日本人は、面と向かって激論したくない、笑顔で別れたい、今を穏便に、という道を取るのである。問題は残り続けるが、それは目下棚上げにする。将来の子孫世代が解決するだろう、と。

敵の敵を作る、つまり集団安保を構築する方が、それをせずにやがて血みどろの一騎打ちにはまるより、よっぽど平和的ではないか。

ともかく日本は、戦うとなるとどうも一騎打ち型の武士道精神で行くから、助太刀を嫌う。ゆえに、「味

方作り戦略」がまことに下手である。肝心の戦略は、「敵の敵」つまり「味方」を作ることである。敵を一纏まりのものとして、それだけを一直線に相手とするのは、単純戦略であり、下等な戦略であろう。

かの日独伊三国同盟（一九三七・十一）は、敵の敵を作らず、かえって連合国側を、最後はソ連まで纏めて連合させ、一塊とさせ団結させた。日本は、一九三〇年代、利害の読みを間違ったので、間違った敵味方関係を作ることになったのではないか。

戦略には、敵を利害関係で分裂させるなどして、「敵の敵」つまり「味方」を作り、その味方に初めの敵を押さえさせるという側面がある。この側面を無視すると、おめでたい兵法になろう。特に国際戦略ではそうなる危険がある。

アメリカは、日本の緊密な同盟関係にあり、味方である——と日本人の多数は思い込んでいる——ようだが、親心からか、日本の安全保障事入りに賛成しない。なぜだろうか。日本の頭を押さえておきたいからであろう。日本には中国と争いをさせておきたいからであろう。それが、アメリカにとって、漁夫の利を得る道であろう。

(ii) 日本は、贖罪を行うが、安易な謝罪は繰り返さない

日本は、総理大臣がしばしば「謝罪外交」を行う国である。しかも同じ事柄、つまり第二次世界大戦の時

代の行為について、繰り返し繰り返し、謝罪し続ける国である。

これほど繰り返し謝罪外交を行う国は、世界中に、世界史に、見当たらない。謝罪外交は早く卒業すべき戦略ではないか。

靖国問題でも、仮にA級戦犯が分祀されると、次はBC級戦犯の問題が穿り出されるだろう。歴史上、「ほとんどの日本軍人は善良であり、一握りの指導者のみが悪者であった、その指導者がA級戦犯である」という終わり方があれば、これは魂抜けの日本人にとっておめでたい。しかし、問題は先に残され、燻り続ける。

それだけではない。「分祀」はほとんど抜けて薄くなった国民共通の魂を、さらに分裂させる作用をする。「靖国で会おう」と約束し期待して散華した兵士の魂が、国民大衆の国民霊の空間から、分祭されることになる。靖国空間は、魂の観点からすると、蛻の殻もゆけとなるであろう。

これは、なんと、「日本人の責任逃れの気分を、そうと感じさせない巧みな論理」なのである。

ヨーロッパ流の、「ナチス・ドイツだけが悪く、ほとんどのドイツ人は悪くなかった」という責任逃れの理論と同一ではないか。当時、一九三三年から一九四四年あたりまで、実際、大多数のドイツ人は、ヒトラー率いる「ナチス」(国民社会主義党)に、こぞ挙って賛成していたのだからである。ドイツ人の責任意識は身勝手なのである。そのくせ、日本に説教してくる。「われわれと同様にしてはいかが」と。その論法の尻馬に乗る日本の評論家も多い。

日本人も、当時は、政権と軍部に、満腔の支持を表していた。新聞の勇ましい記事を取り出してみたいもの。

いわゆる「靖国問題」は、A級戦犯の分祀どまりで事が清算される問題ではないだろう。問題を真剣に考察しなければならぬと思う。この問題は、「明治以来の日本国民」の魂、「国民共同霊」に、深い切り込み傷（医学用語で侵襲）を加える問題だといえるのである。その衝撃は測り知れない。

幸いにも、隣国から繰り返されるご批判は、日本人の浅い思考、水に流す精神に、「反省吟味せよ」と、衝撃を突き付けるものである。日本人の国民教育の上で、ありがたいものである。隣国に感謝したい。

(iii) 贖罪と慈悲の行動を適切に行う

日本には、昔から、「托鉢お坊さん」の行為を美談とする道徳意識がある。つまり、不義の「父無し子」を産んで困っている娘さんが「このお坊さんがこの子の父です」と嘘をついて、その子を不当に押し付けられても、甘んじて抱きとめ連れて帰って育てるお坊さんである。

これには、もちろん、二重三重の深い意味がある。運命の自覚と、隣人愛との意味である。

だが、戦争責任を伴う国際関係では、この「赤子預かり物語」を、表面的に理解してそのように行うと、よい結果は生まれないだろう。

文化が異なり、相手につけ入れさせただけだからである。相手につけ入れさせず、「娘さん、本当の父は

「どなたですか、できることなら、心を入れ替えて、大事な赤ん坊を自分で育てなさいね」と改心させるには、どうすればよいか、今一步踏み込んで工夫する必要がある。

不言実行、善意は通じる、という甘い期待は、方法として捨ててかかることである。

ところが、日本の首相（小泉純一郎）は、二〇〇五年四月二十二日、ジャカルタで行われたアジア・アフリカ会議で、なんと大東亜戦争に直接関係のないアフリカ諸国までも出席する会議で、アジアでの日本の戦争行為につき、「村山談話」を引き合いに出し、謝罪したのである。場所と相手を弁えないこと、兵法に違反すること、甚だしい。

では、どうすれば良かったのだろうか。皆さんが首相であれば、どう考え行動されますか。

（イ）戦争行為に入った日本の理由について正確に説明する

これは、説明の仕方に工夫が要る。日本が、戦争の突入の理由からして「正しかった」というようなことは一切言わないし、「間違った」とも言わない。その最終判断は、世界中の国に任せるべし。

ただし、偏った「日本唯一悪者論」にならないよう、世界の誰もが理解できるよう、当時（一九二〇～四〇年代）の世界について、静かに、科学的研究に基づく客観情報を示す。淡々と、科学的な情報を流す。今更、「日本は悪くなかった」などと言わない。言い張れば言い張る程、中国や韓国、オランダ（インドネシア）の植民地支配者で日本に追い出された人々）などで、感情的な反発が起こるからである。

しかし、過去に蓋をするのではなく、個々の問題は学問的な場で国際語・英語で論争し、世界中の人々が交流するニューヨークあたりで発表し続ける。日本政府も日本国民も、このような「誠意あるしぶとい努力」を続けない。水に流す性質を持つ。それでは説明責任を果さないことになる。

日本は『フォーリンアフェアーズ』のような総合英文雑誌を発行し、世界の識者に投稿してもらい、世界に流すべし。資金は間接的に政府が出す。

(ロ) 日本だけが謝るのでないようにする

過去四百年の世界史を振り返り、先進国が植民地支配を行ったことにつき、負の効果と正の効果とを吟味し、今後の世界史の価値基準を作るといふ議論を提起する。これは日本の歴史学界の諸先生の義務ではないか。

先進国は、イギリス、フランス、オランダ、アメリカ、ドイツ、ロシアなど西洋の植民地帝国だけではないことを知らしめる。

東アジアでは、清国についてもその行為を吟味する。皇帝・支配層は満州族出身だが、国民はその後漢民族が大多数で周辺民族を支配した。共産党政権の現代中国もその後を受けて周辺に帝国主義的支配を続けていることを指摘する。チベット、内モンゴル、ウルムチ、南西の少数民族地帯など。

日本だけが悪者ではないことを、暗に知らしめる。直接弁解はしない。責任のなすりつけ合いになり、日本はどうしても口下手であるし、少数派になるからである。

とはいえ、論争の解決には、少なくとも「これから千年かかる」だろうということを覚悟すべし。

(ハ) 大東亜戦争中のことについて次の点を提起する

① 英米は、中国の「国民党政権」の支援という形で、早くから日本への敵対行動を取ったこと。

② 欧米は日本を取り巻いてA B C Dラインという新しい帝国主義行動をとり、日本を締め上げる行動を取ったこと。

③ 東アジア大陸、東南アジアでの日本の行動には、謝るべき加害行動があったこと。この点については、このノートで何回も指摘した通り、それを隠すのでは断じてない。隠すと世界主義に反すると思われる。

④ ロシア・ソ連も、清・中華民国も中共も、周辺から領土を奪い帝国主義の行動を続けていること。

(ニ) 日本は「第二次世界大戦中、悪くなかった」という論法を取らない

それよりも、二十一世紀の今後に向けての世界人類が求めるべき「共通理念」を探求する。日本だけが、繰り返し謝罪文書を読んでも、二十一世紀の今後の世界世論作りにはならない。二〇〇五年のアジア・アフリカ会議は、そうする最もよい機会であったのに、そのように活用しなかったのは誠に残念であった。

日本国民も、慌てず、孫子の兵法は、広い視野から学ぶことであろう。外交戦略では、一騎打ちの考え方は幼稚なものであると知るべし。

(ホ) 歴史教科書編纂の指針

歴史教科書の問題は、東アジア全体の中で共同議論される所へと移るかのようである。日本と韓国の間で共同討議を示す分厚い報告書を取り寄せた。関係国と、同一の事柄について、同じ意見にならなくともよい。同一の事項について、見解が異なってもよい。歴史は丸ごと科学なのではない。科学のところもあるが、そうでない物語の部分も含まれるからである。

豊臣秀吉が推進した「朝鮮征伐」は、日本から見ると優れた陶工たちが来て、日本の陶磁器産業を飛躍的に発展させたものであるが、朝鮮半島の人々から見れば、とんでもない「侵略」であるということになる。

また、こういう問題もある。各地に根づいた陶工たちの子孫は、今更半島に帰ることはできない。このとき、「償い」とは、どうすることであろうか、と。

学校教育のための教科書問題では、次の点を考慮に入れるようにしたいものである。

- ① 現行の日本・近隣国の教科書の問題点は修正する。特に、日本が悪くなかったことを悪かったように事実誤認するところを正す。「悪いことを全くしなかった」という強弁は行わない。
- ② 日本の歴史において、誇りとし保存し教えるべきところを取り上げて記述し、子供たちに教える。民族の歴史の事実と誇りとを教えない国民は、心の内部から崩壊するであろう。
- ③ 二十一世紀の「人類の理想」とするところを新たに提言し、これに繋がるものの見方を記述に加える。

④国内での自国なりの誇るべき伝統と理想は各国毎に異なっており、日本のそれをしっかりと記述する。ただし、自国の理想が、人類の理想とするところと矛盾せず、一貫するようにしたい。自国の理念の作り方が肝心なのである。むろん、日本の特性を述べることは何ら差し支えない。

「誇りとする」ということは、日本が世界で一番優れているという意味のものではない。そういう「優劣比較思考」は、幼稚な段階の思想であるから、卒業する。すべての領域で、われこそは世界一、日本が世界一、という自慢は崩れる。世界中、「皆が世界一」なのだ、とはいえない。さもなくば、独善史観となる。

(六) 報恩と贖罪の実行とは

ここで、愛の実行という点について、興味深い「回天」の思考を紹介しておきたい。これは、相当思い切った考え方の転換であり、普通われわれの自尊と利己心に凝り固まった頭には思いもよらない提案であり、とんでもなく危険なように思えるが、人類の歴史においては、こういう回天の思考とそれに基づく行動こそが、偉大な効果を発揮するのではないか。

東洋に「報徳」——徳に報いる——という言葉がある。日本が降伏したとき、大陸での戦争相手国の指導者であった中華民国の蒋介石総統は、日本に対して相当程度、報徳の行動をとった。つまり、日本の軍人と居留民を、無償で、日本内地に送還することが実行されたのである。

この潔い好意に満ちた行動は、もはや「知る人ぞ知る」になってしまったが、いつまでも語り継がれるべ

き美談びだんである。——もちろん、これに冷水を浴びせる批評もある。蔣氏しやうは日本軍の武器を手に入れたかったのである、と。どのような批評をするかは、批評する人の人格にもよるだろう。

蒋介石總統の行為は、満州におけるソ連のスターリンによる「日ソ不可侵条約」の一方的で不当な条約破棄きと、ソ連軍による殺戮さうりく、暴行ぼうこう、略奪りやくだつ、それにシベリア抑留よくりゆう、北方領土略取りやくしゆという蛮行ばんこうと比べれば、雲泥うんでいの差があることは確かであった。

さて、若くして、大東亜戦争中の思想的指導者の一人であり、それゆえに教職追放にもかかったある一人の碩学せきがくは、晩年おんねん、往時おうじを偲しのび、次のように述懐じゆつかいした。

日本は第二次大戦中、いや、それ以前から、中国を戦場とすることによって、「天文学的数字」になるほどの物質的、精神的被害を与えた。ところが、当時の總統そうとうしやう、蒋介石かいしせきは、この損害に対する賠償ばいしょうを放棄ほうきして、日本に対し「怨うらみに報むくいるに徳をもつてする」といった。その言葉を聞いたとき、私は五体ごたい為ために震ふるう、といつてよいほどの感動を覚えた。これこそ東洋精神の神髓しんずいではないか。

このところ、日本の偉えらい人たちは、南へ行ってはあやまり、北へ行ってはお詫わびをし、その都度つど、巨額きふくの賠償を約束している。しかし、賠償の場合は、払はらってしまえば貸かし借かりなしで、後は全くの対等である。

だが、恩義おんぎの場合はそうではない。それは終生しゅうせい忘れることのできないものである。日本は、その受けた恩を返さなければならぬ。どれだけ返せば済むというようなものではなく、気持ちの続く限り報恩おんしなければならぬ。

では、どうすればよいか。幸いにして、日本経済は高度に発達している。……

日本の国内では、企業はゼロ成長にとどめ、拡大再生産をしたいのなら、その分中国にもって行き、その地で拡大再生産が可能であることを示した上で、二十年、三十年後には、それを日本の企業ではなく、中国の企業として差し上げて来る。そうして二、三十年たったら、さらに次の産業について同じことをする、というふうに、である。

（難波田春夫『近代の超克』行人社、一三三―三四ページ、ルビ追加）

これは、ちょうど日本経済のバブルが破裂はれつしたころ、一九九〇年十二月に、経済倫理けいざいりんりについてのある国際会議で発表された見解である。朝鮮半島と東南アジア諸国にも、同様の考えが当てはまるであろう。隣人愛とは、どのような心でもって、実際に何をする事か、これによって考えさせられる。

なお、蒋介石氏の言った「老子」の引用については、孔子との対比を第十一章で説明しておいたので、参照してほしい。

むろん、中国側（中華民国及び中華人民共和国）は、日本に――膨大な金額にのぼる筈の――賠償を要

求しなかった。そして、日本は、それでは済まぬというので、ODAなどを通じて、この方向で少しは報恩に尽力してきた。しかし、物事を行うときには、その形以前に、精神原理が大切である。ここに示された道は、次の通り。

① 国民が単に税金の支出をもつて、援助という形で、政府任せにする、ということでは済むものではない。

② いつまでも意地を張り合い、日本はいじけた謝罪を繰り返し、また相手には謝罪要求を繰り返させて、お互い嫌な気分を煽らせる、という道でもない。

③ 国民こそって報恩の精神となり、企業の活動を通じて双方が利益を上げながら、徐々に企業を譲る。

これは、まさに二宮尊徳が実行した道、すなわち報徳の道であり、相利共生を基にした実質のある道であるといえよう。

実は、こうした難波田提案の後、一九九〇年代の後半から、中国経済は急激に、あたかも世界市場のブラックホールであるかの如くに、世界中から技術と資本を呼び込み、それを中国自身の安価で優秀な労働力と結び付け、「世界の工場」としての地位を築きあげつつある。日本の企業もこの流れの外に立つものでなく、中国へ中国へと、草木が靡くように、東シナ海を渡っている。技術も資本もノウハウも、一気に中国に吸い寄せられ、巨大な利益が中国に献上されつつある。

まさに、難波田教授が一昔前に見通したように、形は変わるけれども、事実として、中国になびく風が強まりつつある。問題は、企業も国民も、その精神が報恩——闇雲の謝罪ではない——というものに高まっているかどうかである。単に儲ける先があるから出て行くというのでなく、報恩の精神で行動したいものであ

る。

恐らく、こうした報恩の行為は、メンツを重んじる日本側の旧いナショナリズムにとっては、大変な利敵行為と映るであろう。曰く、

①そんなことを中国にしてやれば、時の中国政府はますます増長して、日本に反日圧力をかけるために、謝罪をエスカレートし、要求し続けるだろう。

②北京政府は、靖国問題のように「脅し」という手を使って、日本から金を巻き上げ続けようとするだろう。

③大陸での日本軍による戦争被害についても、実態を超える偽の数字をでっちあげて自国民に宣伝し、自国民に反日教育を仕込み、日本憎しの感情を強化し続けるだろう。

④中国経済の発展を援助すれば、中国が強大な軍事大国となるのを促進するだけだ。その暁に、日本は、核大国中国の言いなりになるほかなくなる。一体、日本は中国に従属せよ、とでもいうのか。

もちろん、世界平和と日本のナショナリズムから考えられるこのような危惧は、尤もなことであり、その可能性はなくなりはずまい。やがて中国が軍事大国となり、経済力に物を言わせて、アジア地域において、帝王の如く横暴に振舞う恐れが無いとはいえない。それは他国にとって非常に困ることである。大陸の人々は、巨大な版図を占めるに到った漢民族の文化遺伝子を、今も十二分に受け継いでいる筈。

巨大となった民族は、周辺を侵略する遺伝子を保持しているものだ。

しかし、武によって興る者は、必ず武によって亡ぶ。この警告を遺したのも中国の先人である。だから一方では、われわれは冷静な科学的対話を、粘り強く積み重ねるのである。経済の面で支援や報徳を行うだけであるならば、隣人愛とはならないだろう。一方で、あくまで堂々と、相手の精神の向上のための対話を行なうのである。

恨みと謝罪とを乗り越えることなしに、東洋近隣の平和はあり得ず、日本の安心も保障されない。われわれは、起死回生の献身を、粘り強く実行すべきであろう。真に誠の心となれば、隣人愛への道は見えて来ると違いない。

報恩というものは、何もODAのような形でいいわゆる「無償」の援助による必要はない。無償援助でなければ報恩にならないというのは、全くの誤解である。中国脅威論の人々が心配するのは、日本からの多額の無償援助が中国側の軍事力増大に手を貸すことになるという側面であるが、発展した中国への、無制約のODAをそろそろ終わりにする、あるいは減額する、というようにすればよいのではないか。

しかし、よく考えてみれば、事実上は、ビジネスライクに見える売り買いという取引方式でも、歴史の間を重ねれば、その方式によって十二分に報恩が行われるものだということが分かる。

物造りという行為、及びその製品の売り買いという行為をじっくり考えてみられたい。

日本の政府援助でなく、民間の営利会社が、金を儲けるためのビジネス取引として、資本と技術とを中国

側に提供し、中国側の安い労働力を利用して物造りを行い、その製品を日本に輸入して利益を上げるとしよう。最近、中国で中国市場向けに生産する方式が増加しているので、それも計算に入れてよい。

その際に、高度な機械技術を中国の労働者諸君が使いこなすことができるように、労働者の教育を行い、技術の移転いってんをする必要があり、現に行われている。中国の人々の学習能力と意欲はとても高い。相手側に技術を学ぶ意欲がある限り、技術移転は実に速すみやかに行われる。ここに、報恩の秘密があるのである。

賃金の支払いでも、製品の売り買いでも、そこだけ見るとビジネスライクな損得行為でしかない。そこでは、行為は報恩というような意味はなくとも、物事は順調に進んで行くはずであり、現に急速に拡大している。

だが、技術の教育と取得は、価値の生産能力を無償で、中国側に移転・援助することになっているのである。ここに、売り買いという損得づくの経済行為が、報恩という道徳行為になり得る秘密がある。この物造りの場合には、売り買いの行為の中に、無償での技術援助が含まれるのである。

昔、唯物史観ぶつしつかんの提案者カール・マルクスは、労働力が新たに生産する価値——剰余価値じょうよかち——を資本家が搾取さくしゆするところに、しかも合法的に、フェアに、搾取するところに、資本主義の内部矛盾うちぶむじゆんがあると述べた。

その逆に、現代では合法的な生産と売り買いの中に、価値の生産能力（ケイパビリティ）の無償の移転が行われるのである。日本企業が毎日支払う賃金は、毎日の中国労働力への、仕事能力への支払いであるが、

そのときに習得した技術は、今日の賃金・仕事能力への支払い以外の無償の贈与部分なのである。

(七) 反搾取と正義の交渉を行う

外国の企業を導入し、あるいは政府が外国人技術者を雇い入れて、国民が技術の学習を行えば、国家国民の経済は発展する。なぜ、グローバル化が各国の経済を発展させるのかを問えば、ここにその理由があるといえる。日本でも、明治維新後には、そして、大東亜戦争の終結以後には、外国からの技術を、相当多く無償で取り入れたことになっている。外国には、それだけ恩があるのである。

こういう技術贈与の関係を続けられれば、やがて中国側は技術を学んで、経済力と人間力をつける。その分だけ、日本側は「会社を中国側に移転すること」になるのである。もちろん、技術というものの中には、人間関係能力も、物造りの能力も、会社の経営能力も含まれるのである。

日本は、大東亜戦争後、アメリカから多大の技術贈与を受けたが、それに対して、報恩を相当程度果たしたといえる。

特に、トヨタ方式とか、環境対策とか、安全な製品作りとかにおいて、自動車産業のアメリカ移転により、恩返しを行いつつあるのである。東南アジア地域に対しても、同様のことがいえる。日本の進出・報恩なかりせば、東南アジア経済は未だかなり低迷のままであつたろう。

難波田博士の提案は、お人よしの、無償での、会社寄贈の提案ではない。こういう価値の移転と教育と学習という経済の眞実しんじつを見越しての提案であったのである。

ただし、問題は、そのような技術移転の行為を、どんな精神で行うかである。欲得づくの精神であれば、相手側はコピー製品をどんどん作ることに道を見出す。今の中国はその通りである。その点は、特許権とっしゅけんをきちんと衛まもらなければならぬ。行為はフェアでなければならぬ。フェアな損得計算の行為の中に、右に見るような無償の贈与として、価値生産力の移転が行われるのであり、それを報恩の精神で行うのである。

報恩とは、何もODAを続けることとか、会社の所有権を相手に差し上げるということに限られない。通常の取引を行いながら、徐々に報恩ができる。問題は精神に在あるのである。

売り買い、ビジネス、経済という行為は、精神次第で、報恩にもなれば、搾取さくしゆにもなるという両義性りょうぎせいを帯びているのである。

日本人は、何時の頃からか傲慢ごうまんとなり、大陸の歴史からの歴史上の恩恵おんけいというものを忘れた。漢字の恩、儒学など学問の恩、鑑真和尚かんじんおしょうなどが施ほしてくれた宗教の恩などを忘れた。現代中国の発展は、もう一つのアメリカが近くの大陸に出現することに等しいが、そんな忘却ぼうきやくの心では、その時代を見通して、新たな共栄圏を作る展望を持ってないだろう。共同体づくりへのこの問いは、困難ではあろうが、捨て去ってはなるまい。

また、もう一つの隠された発想の盲点がある。われわれ日本人は知らぬ間に、ビジネスは競争である、国家と国家との関係もいつも競争でありその極限は戦争である、という見方に嵌っているのではないか。

しかも、競争は、戦争は、悪であり、それを乗り越えることが善であり理想であるという物の考え方に嵌っているのではないか。

日本と中国との関係も、いつも競争であり戦争であるという見方に、われわれは嵌っているのではないか。

反対に、平和が理想だとしても、戦争はいけなから武力の準備はいけない、一切武力は不要、という平和主義に嵌るのも、逆の盲点であろう。

先の章でエコロジィの見方を紹介したように、人間関係には四つの型がある。相利共生、片利共生、寄生、そして捕食である。しかし、これらは実は同時に絡み合っており働いているのである。

もしも、「ビジネスは競争である」、「贖罪とか恩返しなどはそこに入り込む隙はない」、と思いつむならば、それは深い盲点に嵌った心理ではないか。欲得づくの売り買いにも、いつも贖罪とか報恩の可能性が潜在的に含まれ、行われているのだが、それが分からないと、贖罪報恩のために中国の人々と取引を行うという真実が見えてこないようになる。

実は、損得づく、欲得づくの売り買いにも、常に潜在的に、報恩の行為、無償の贈与が行われている。わ

れわれが意識するとしないとにかかわらず、それが真実である。それを意識して行うようになれば、真実はより良く実現することになるのである。売り買いについての常識的な反感は、この点を見逃すのではないか。

先の難波田提案は、一見、奇想天外に聞こえるけれども、意外に事物の実相を踏まえているのではないだろうか。

一方において、このような報恩の観念を持つことは必要であるが、それは何も中国に対してのみでないことは、以上の点からお分かりいただけるであろう。

ところで、仁や隣人愛の土台には、正義の基準がなければならない。報恩の基礎にも正義を欠いてはならぬ。最近重要な問題が中国により引き起こされつつある。中国による東シナ海におけるエネルギー開発の強行である。

以前から、中国は日本に断りなしに海底地下資源調査を進め、ついに二〇〇四年に入って探掘設備を建設し、試掘を始める模様である。これは、まさしく日本の国家主権にかかわる重大問題である。この認識を持つことと、日中戦争における日本の行為について、贖罪報恩の観念を抱くこととは、全く別の事柄である。これは、新しい正義の問題である。この資源問題に対しては、国際法に則り毅然とした措置を取るべきである。あれとこれを混同してはならない。

ところが、日本政府は、こういう中国の動きに対して、何ら有効な対応措置を講じていない。いつもの軟

弱外交、腰砕け外交、泥縄外交をとっている。共産党が数十年も支配する中国に対し、内閣が長くて三年くらいしかもたない日本では、国益を貫徹する筋の通った外交は全く行われないのである。

しかも、日本が船舶を当該海域に派遣し、対抗的に設備建設を行なうとして、仮に中国側が実力行使を仕掛けて来たとき、日本は誤った理想主義の憲法第九条により、手足を縛られているから、スゴスゴと逃げ帰るほかないであろう。

外交というものには、かたや誠心誠意とともに、同時に正義に基づく実力の裏付けが必要である。これは、相手が中国に限らず、対露でも同様。念のため、外務省の見解を掲げておく。

〈資料〉尖閣諸島の領有権についての基本見解（日本政府）

尖閣諸島は、一八八五年以降政府が沖縄県当局を通ずる等の方法により再三にわたり現地調査を行ない、単にこれが無人島であるのみならず、清国の支配が及んでいる痕跡がないことを慎重確認の上、一八九五年一月十四日に現地に標杭を建設する旨の閣議決定を行なって正式にわが国の領土に編入することとしたものです。

同諸島は爾來歴史的に一貫してわが国の領土たる南西諸島の一部を構成しており、一八九五年五月発効の下関条約第二条に基づきわが国が清国より割譲を受けた台湾及び澎湖諸島には含まれていません。

従って、サン・フランシスコ平和条約においても、尖閣諸島は、同条約第二条に基づきわが国が放棄した領土のうちには含まれず、第三条に基づき南西諸島の一部としてアメリカ合衆国の施政下に置かれ、一九七一年六月十七日署名の琉球諸島及び大東諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定（沖縄返還協定）によりわが国に施政権が返還された地域の中に含まれています。以上の事實は、わが国の領土としての尖閣諸島の地位を何よりも明瞭に示すものです。

なお、中国が尖閣諸島を台湾の一部と考えていなかったことは、サン・フランシスコ平和条約第三条に基づき米国の施政下に置かれた地域に同諸島が含まれている事実に対し従来何等異議を唱えなかったことから明らかであり、中華人民共和国政府の場合も台湾当局の場合も一九七〇年後半東シナ海大陸棚の石油開発の動きが表面化するに及びはじめて尖閣諸島の領有権を問題とするに至ったものです。また、従来中華人民共和国政府及び台湾当局がいわゆる歴史的、地理的ないし地質的根拠等として挙げている諸点はいずれも尖閣諸島に対する中国の領有権の主張を裏付けるに足る国際法上有効な論拠とはいえません。

（外務省ホームページより、二〇〇四年六月三十日、ルビ追加、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senkaku/index.html>）

人間集団のいのちが健やかに生きて行くには、幾つかの条件が必要である。

第一は、集団内部での平和である。つまり国内の平和であり、治安である。日本の戦国時代のように、隙あらば他人の領分を侵そうとする者が跡を絶たない時には、人はおちおち枕を高くして寝ておられない。気

を許すと寝首を搔かれるという結果になる。

第二は、外の集団との平和である。つまり外国——の人々——との平和である。これが国際関係であるが、国際関係は未だ戦国時代と左程変わらないところがある。だから、相手を疑い過ぎてもならぬが、かといって信用し過ぎるのも危ない。

こういうときには、まず正義を基準として行動するほかない。「信なくんは立たず」であるが、甘い見通しの下での信用や愛情では、自分のいのちを保存することさえ、不可能な場合が多い。

正義のルールを踏まえて、順守すべき理想とは何か。その上に愛とか慈悲という行動原理を重ねるということである。まず、他に求めるより自分から進んで実行する。国益のぶつかる外交では、こういう重奏的な精神でずぶとく対話することである。

穏便に何でも事が起きないように、と遠慮して手遅れ外交に陥るのは、日本の常であつたが、それはかえって問題の範囲を拡大し、取り返しのつかない事態へとつながるのである。竹島問題、北方領土問題はその痛恨の事例であるし、今また東シナ海での資源問題がそうなりつつあるのではないか。

腰抜け外交は、隣国と恒久の平和を積み上げる道に障害となるだろう。東洋平和の構築には、大東亜戦争までの日本のまづい外交の轍を繰り返してはなるまい。

われわれは、まず正義の基準を明確に適用するという態度が求められる。愛はその上で意味を発揮する態度である。

現代の国際関係では、このような行動原則を忘れてはなるまい。この点、歴史上、どうも日本人は、悲しいことではあるが、隣人との付き合い方が下手であり、今一段と訓練が必要であると思われるのである。アメリカと中国は、その訓練を重ねる上で、日本にとって避けられない相手であり、またとない好敵手なのではないか。

アメリカは歴史は短く理念で押し通すことに、中国は歴史が古くて実利で稼ぐことにおいて、それぞれ長のある国である。この二つの異なる性質の大国を相手に、理念と実利との双方を巡る訓練が、今われわれ日本人に求められているのではないか。

われわれは、日本のこうした一國平和主義の愚にもつかない無防備性を乗り越えねばならない。贖罪報恩は正義と実力を排除するものではないということを、念のためここに記しておきたい。読者の皆さんはいかがお考えですか。また、中国の政府も、こうした点をよくよく考慮いただきたいものである。再度、東アジアに熱い戦争が起きないように願う。

中国脅威論は、日本の劣等感の裏返し表現でもある。また、日本人の悪い傾向なのであるが、相手と自分との間に一対一に限定された関係を設定し、シーソーのように相手が強くなるとそれだけ自分が弱くな

るといふ風に考えて、無闇むやみに恐れる。日本のかつて日中戦争の頃の大陸戦略にも、このような心理が働いたのではないか。同じく対ロシア・ソ連の脅威、対アメリカの脅威でも……。

たしかに、中国の巨大化は、もちろん世界的に石油資源の奪うばい合いとなるような局面を生み出すだろう。尖閣諸島せんかくなど台湾に近い海域で領土紛争も起きるだろうし、現に起きている。

しかし、中国の発展は、中国自体が数多くの国々と抜き差しならない関係を取り結ぶことであり、中国としては、自国の利益追求のみに有利な基準でもって、永続的に勝手な行動を取ることが不可能になることもある。

ドン・キホーテ物語のように、日本に永続的な脅威となるような中国像を描いて、われわれが脅えることではないのである。中国の人々もそれほど近視眼きんしがんではあり得ないであろう。むしろ、われわれ日本人の方こそ、近視眼的に物事を考えて、感情的に萎縮いじやくしたり、逆に突進したりしないことである。

なお、大東亜戦争における回天の思想の例としては、先に述べた廣池氏の提言——大陸からの撤兵——を参照されたい。

(八) 各国は謙虚な自律史観を確立すべし

国際関係では、いわゆる足を踏ふまれた側と踏んだ側の間の痛みへの理解の溝みぞは、容易に越えられない。まず、相手の足を踏んだ側は、事実ならば、正確に踏んだことを認めるのでなければならぬ。そして踏まれ

た側は、ある条件が満たされれば、いい加減「許す」という寛大な心が欲しい。

相手をいつまでも許さないという「しつこい心」は、かえってその心を持つ側自身にマイナスの効果をもたらす。外国に対するそのようなしつこい恨みの心は、その国民自身の心の素地ともなって、国内の自分の身の周りの人にも向けられるのである。「妻も敵なり」という言葉を持つ国さえある。心は、あれとこれとを区別できない。レンコンの根のようにつながっているからである。

敵を許し、敵を愛しなさい、

実は、敵はどこにもいない、

地上の一切と、和解しなさい、

と言われるゆえんである。

もちろん、国際関係ではそういうコモンセンスなどできっこない、「ジャングルの無法」が通用するからだ、という立場もある。

「ジャングルの無法」が通用するというのは、猛獣の住むジャングルの中では、理性の法といったものは存在せず、力の強いものが勝つという弱肉強食の法が支配する、との意味である。

生態系では、いのちの相互作用において、相手を捕って食うという捕食の關係が働く。無法とは、それが前面に出るとのことである。

たしかに、人類という動物にも、ジャングルの動物たちとあまり変らない無情さがある。イギリスは、ビルマ、現ミャンマーを植民地にするとき、王様をどこかに連行していつてしまった。アメリカは、ハワイの王朝を滅ぼした。スペインの人々は、インカ帝国などを片っ端から踏みつけた。しかし、欧米ばかりも批判できぬ。明治の日本も、大院君一派と謀り、李王家の高宗の閔妃王妃（一八五一―九五）を「暗殺」するなどの非道を行つた。

大陸では、漢民族あるいは異民族の国家が周辺を侵し、清朝は内モンゴルやチベット民族を支配した。国民党政府の蒋介石氏は、北伐と称して地方政権を力づくで抑えようとした。毛沢東政権は、そのチベットを「解放」と称して支配した。帝国主義とはそういうものだった。力の強い者が勝つ。ルールは力比べのみ、強いものが勝ち、勝つた者が正義なり。

地上の真の法とは、しかし、いつまでも腕づくで強いものが勝ち残る、というものではない。いのちのエコシステムには、力任せで永続する絶対的な優越者は存在しない。われわれは、この真理を歴史を顧みて自らに悟らねばならない。

百獣の王ライオンとて、いつまでも絶対的な強さを誇れるものではなく、弱小動物を食い尽くすと、えつて自分が食糧不足に陥り、餓死して、速かに大地の土と化すほかない。大地はすべてを受け入れる。あらゆるいのちは、土に還るほかない定めにある。横暴なる国家の運命また然り。

いずこの国においても、国際関係においては、三つの史観が成り立つのではないか。自尊史観、自虐史観、自律史観、がそれである。

① 自尊史観

これは、自国の歴史を世界中で唯一最高のものと見なす史観であり、傲慢意識に立った歴史観であって、既に古代ギリシアに見られる。アリストテレスは、ギリシア人でない者に対して、「バルバロイ」（野蛮人）という言葉を使っている。

近代では、先にも言及したように、ヘーゲルやマルクスは、進んだ西洋、遅れた東洋という意識をもつて、世界史の発展段階を整理した。アジアには帝王というただ一人の者の自由しか存在せず、他の人間はこの唯一の自由人たる王への隷従者である。しかし、現代のヨーロッパでは、すべての人が自由を知っている、と。

白色人種が自分たち以外は人類と認めなかった白人優越史観も、この自尊史観の例であり、アメリカなど欧米や豪州（オーストラリア）——白豪主義——に強かった。

日本でも、かつて一時期「万邦無比」と自惚れる人々が多かった。日本人はペリー率いる黒船に驚いて眠りから覚め、日清戦争に勝つて少し自信をつけ、さらに日露戦争に勝ち、「白人に勝った」と有頂天に舞い上がり、大喜びし、大自信をつけた。その辺りから、自信も過剰となったようである。

しかし、既に述べたように人類世界の現実では、「万邦無比」ではなく、「万邦有比」であったのである。「日本だけが飛び抜けて優秀なのだ」と言わねば、生きがいが見出せず、誇りが持てない、と思うのは未だ悟りが浅い証拠であろう。

否、悟りどころではなく、劣等感であり、昏迷であり、迷妄であり、虚妄ではないか。それは、劣等感（コンプレックス）の裏返しに過ぎないものである。

東アジア大陸の古代における古典にも、そうした自尊史観は色濃く認められる。既に述べたように、夷狄とは、東方の外国人たる夷と、北方の外国人たる狄という意味であり、『魏史』の中の倭人伝は、その東夷伝——東方の劣等人たちの記録——に属する。西戎や南蛮という言葉も見える。日本も南蛮という用語を輸入して使った。

これは、自分たちを文化の進んだ「中華」とし、他を野蛮人と蔑む歴史観の表現である。大国とか大民族とは、どうもそういう哲学を持つものらしい。持つからこそ大国になったのであろうか。それとも、大国になったから持つのであろうか。

もちろん、大和朝廷によって編まれた歴史書である『古事記』と『日本書紀』にも、人間差別の思想がしばしば顔を出している。既に紹介したように、古代人が『風土記』などに記しているエゾ、エミシ、クマソ、ツチグモ、サエキなどの呼び方もある。われわれも、他民族のことだけを指弾できまい。

② 自虐史観

これは逆に、自国の歴史は罪に汚れた暗黒の歴史だ、と自ら卑下する史観である。日本のような敗戦国に多く、持たざる国、悪いことばかりして来た国、侵略ばかりして来た国、謝罪しない国……などのマイナスのイメージとなり、それが国民の心に巢食い、国民の能力を殺ぐ作用をする。

(一概に自虐史観というのではないが、次に紹介する「自由主義史観」を批判し、専ら近代史の「負の側面」に焦点を当てるものもある。例えば、藤原彰ほか『近現代史の真実は何か』旭書店。また、松島榮一・城丸章夫編『自由主義史観』の病理』大月書店。)

実は、いわゆる左翼の人たちだけでなく、一部の保守派にも、日本に関する自虐史観は潜んでいる。欧米モノサシ主義の保守派、背景に多くはキリスト教信仰や欧米流自由主義の思想しか有しない人々である。それは、インテリに多く、「われわれだけは、そういう汚れた者たちとは別人種だ」という自意識をもって、対岸からの、あるいは「高みの見物」としての、批評に現れる。

しばしば文化人たちが、「日本の常識は世界の非常識」と、日本を十把一絡げに決めつけるのも、これまた自虐的な文化論ではないか。

日本の常識(コモンセンス)の中軸は、皇室を中心として連綿と続いて形成され、伝えられてきた高度な文化価値の中軸と、全国各地の伝統的風土に根ざす郷土文化に他ならない。だが、まさかそれが世界に通用しない非常識な文化だともいうのだろうか。「特殊」という意味の非常識的な部分は、すべて各国に

必ず存在している。日本だけではない。

歴史論では、国民大衆はいのちの伝統を息長く見守るべきであって、評論家流の猫の目のようにコロコロ変わるキャッチフレーズに幻惑されてはならぬ。

③ 自律史観

この史観は、自虐と自尊のいずれにも与せず、事実に基づいた謙虚な誇りと、同時にたえざる自己反省の要素を含んだ歴史観である。国際関係では、相互尊敬つまり互敬互讓の精神でもって、他国の歴史観も尊重する。エコロジーでいう相利共生や片利共生の立場である。

これからの時代、地球社会の正当な一員としての各国家の歴史観は、唯一、これしかないのではないか。

古典において、外国人や宗教の異なる人々を、異邦人とか夷狄と呼んで一括し、区別というより差別する伝統を持った文化は、すべからく大反省すべきなのである。実はこういう伝統からまったく無縁な文化は、地球上に一つとして存在しないのである。すべての文化は原罪を負っているのだ。

あまりにも度の過ぎた自国自慢は、自分の心の中に虚偽の自信を培養し、物事に対する慎重な反省と吟味の心を失わせ、「俺たちには何も欠点はないのだ」という傲慢心を募らせ、やがて他国民を蔑視し、国際社会で嫌われ、大きな失敗を重ねることにつながる。

しかしまた、自国に誇りを持たず、自己の長所を発見できなければ、大きい度量をもって他国に利益（り

やく)を頒ち与えることが出来ず、輕蔑されよう。他方、自己の失敗や思慮不足を全然反省しない者は、個人も、民族も、国民も、国家も、ともに自分から滅びの道を歩む。その例、歴史に枚挙に遑なし。

いのちは、遺伝子によって先天的に設計図が決まっているが、いのちの生存と発展はそれだけでなく、後天的な「学習」と環境適応によって左右される。絶えず学ばない者は発展しない。生存さえ覚束ない。われわれは、謙尊而光——謙ハ尊ク而シテ光ル——をモットーにして歩みたい。

(九) 歴史観のホコリを払う

歴史には、ホコリが付き物である。個人は家系を誇り、民族は起源神話を誇り、国家は建国神話を誇る。だから誇りは、人間を墮落させる「ホコリ」(埃)と隣り合わせなのではないか。注意を怠ると、それがすぐに頭を擡げる。

仏教では「本願ほこり」というものを戒めてきた。歴史(観)には、本願ほこりがあり得るのではないか。

「善人は救われる。いわんや悪人をや」

「わが民族は、こんなにも優秀なのだ」

「だから、道に外れることは何一つ行っていない」

というような思い込みがそれである。これは親鸞の「悪人正機説」の間違った解釈であろうか。一体、ど

んな時に、誇りが埃に变身するののか。

アメリカは神の国である。神の心を実現することが国是であり、国の方針となっているからである。「独立宣言」は、まさしくそのことを物語るものといつてよい。

もちろん日本も神仏の国である。それは、神仏の心に従おうと努める——従い切っていると自慢してはならぬが——随神の国という意味である。ユダヤ教のイスラエルも、イスラム教のアラブ各国もみな、神の国である。世界中の国は、悉く神の国である。そして、それを善くするか悪くするかは、国民の道徳心次第であろう。

ただし、そこで「わが国、われわれだけが、唯一正統の存在である」と惚れると、誇りが埃に転化するわけであろう。埃とは、心が曇って、物事の実相が観えなくなった状態である。それを釈迦は無明と名づけられた。

これからの地球は、埃を払い、暗から明を目指す人々の住むべき地球なのである。

この埃こそ、人類世界が今尚、戦争という悲惨な行為を生み出し続ける原因なのではないか。しかも、個人の心理においては、「埃を取り去りましょう」、「そうありたい」ということが容易に分かるし、少しは実行できるのだが、いざ集団となれば、どうにもそれが難しいようである。集団心理の御し難き。

心理学者のカール・ユング（一八七五―一九六一）がいう「集合無意識」(collective unconsciousness)

には、そうした埃が沈殿し、「複雑な塊」（コンプレックス）へと増長し、事あるごとに頭を擡げてくるのである。その埃が共同幻想なのではないか。

誇りは埃に転化しやすい。桑原々々。

日本民族の固有信仰である神道は、随神の道——神の心に沿う生き方——を教え、純真な神の心を学び、「清明心」（きよき、あかき、こころ）という聖なる心を力説する。埃無き心である。そういう神道が、仏教と儒教——道教も——を受容し習合して、われわれ日本民族の心の良質部分を作ってきた。われわれは、歴史におけるそうした聖なるものの正しい役割に思いを致さねばならぬ。

二〇〇一年九月十一日、アメリカを襲った同時多発テロに際して、ブッシュ大統領は一度、凶らずも、「言ってはならぬ言葉」を口にした。イスラム教に対抗する「十字軍」という言葉がそれであった。

その発言はすぐに撤回されたが、アメリカの多くのキリスト教徒は、自分たちの集合無意識の内に、いつも昔の十字軍の記憶を秘めており、それが「口をついて出る」のだろうか。

同時に、アメリカでは「パールハーバー」と言う言葉も持ち出され、二十世紀の悪夢を想起させた。同様の集合無意識のなせる業なのであろうか。昔の「ジャップ」（JAP）という言葉も、今なお時折、甦る。

われわれ日本の先人世代も、特に昭和時代、大東亜戦争中、「鬼畜米英」というスローガンを唱えて敵愾

心を煽り、一心に団結して戦った。ただ、日本では鬼畜米英という言葉は、もはや死語であろう。しかし、アメリカでは「ジャップ」は死んでいない。そして、その言葉を国連総会で繰り返し使うアジアの小国があったが、使つてよい言葉とそうでない言葉の区別が分かるように、外交官としての儀礼の学習を心掛け、英語の習熟度を高めることを期待したい。

日本人には、ロシア人というのは、いつも太平洋に向けて「南下」を狙い、領土拡張欲が強く、油断ならぬ民族だ、というイメージがある。シベリア抑留の非道や、北方領土の返還交渉での「ずるさ」は、そのイメージの正しさを証明して余りあろう。

しかし、他人ばかり責められぬ。日本人の多くが、東アジア大陸や朝鮮半島の人々に対しては、尊敬と共に、蔑視、警戒感をタブラせて見る。

われわれ日本人も、自分の集合無意識の土蔵にしまつてある言葉を、取り出してきて「日干し」し、衣替える必要があるのではないか。

もつとも、日本人は、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクト女史（一八八七―一九四八）が揶揄したように、いわば「コロリ病」という病原菌を持った国民である――義経の八艘飛びよろしく――一方の極端から他方の極端へと跳び移るのである。いとも簡単に物事を水に流す性質を備えていて、行動の原則を簡単に変更する、と映るらしい。（名著『菊と刀』を参照）

日本人は、それまでアメリカを鬼か畜生のように思っていたのに、一九四五年、大東亜戦争が終わると、

「アメリカの兵隊さん（ヤンキー）大歓迎」と変心した。

私も子供心にその種の空気を吸って育った。大歓迎は筆者（一九四一年生まれ）の世代の特性であった。私は、ジープ、ハーレーのカッコ良さと共に、ヤンキーの兵隊さんから貰ったキヤラメル、チョコレート、カンツメの味を今でも思い出す。

歴史の空気は、大人よりも、子供の心を最も深く強く捉え、そして三、四十年後にもその効果がジワリと効いてくる。

歴史の学習や教育でも、国際論争が起きるが、取り組み方を進歩させたいものだ。何を、どのように教えるかについては、各国の主権の範囲の事項であり、各国間で簡単に意見が一致するなど期待できないだろう。

しかし、お互いの国民が、関係国の歴史教科書を簡単に見ることができるといふ仕組みを作るべきであろう。相互理解のために、何よりも欠かせないのは情報交流である。人は、知らないものには不安と不審の心を抱く。お互い相手のことをよく知らないままに非難を投げ合っている、問題は解決しない。

その意味で、各国の歴史教科書を相互に翻訳して提供し合い、一般国民が自分の目で読めるようなサイブスを行なうNPOなど、ネットワークをつくるとよいであろう。政府間の組織という政治が絡むので、純粋に民間のものがよい。それさえも認めないような政治体制では困るが……。

私は、各国の歴史教科書を外国に出かける度に集めて読んでいます。例えば、シンガポールの教科書には、日本兵の蛮行ぶりがかなりのページ数を割いて記述してある。華僑への弾圧が激しかったから、反日意識は今も強いのである。東南アジア各地は、中国大陸から進出し流出して行った中国人が占拠しているところが多くて、反日感情が時に燃え上がる。

もともと、周辺国の教科書が日本をどう描いているかを強く気にするのは日本の側であり、次に日本の教科書の記述に神経を尖らせるのは、中国と韓国が筆頭である。（別枝篤彦『世界の教科書は日本をどう教えているか』朝日文庫、勝岡寛次『韓国・中国「歴史教科書」を徹底批判する』小学館文庫、など。）
このような手に入りやすい出版が各国で多くなることを期待したい。

国と国との国際関係は、身近な人間関係と似ている。こちらが心の中で相手を嫌って憎いと思えば、その心が相手にも反射して、相手もこちらを嫌い憎いと思うようになる。心の遠隔作用である。ペリー来訪この方、過去一五〇年足らずの内に、日米の間でもそういう不正常的な関係が発生した。

むろん、アメリカ合衆国は、はじめ陸上の帝国主義を行って形成された。当初、僅か十三の州から出発してテキサスや西部を併合し、次に太平洋に出てハワイ、フィリピンやグアムなどを占めた。

さらに東アジア大陸を望み、門戸開放といって日本に開国と譲歩を迫り、日本人を「ジャップ」とか「黄色い出っ歯のサル」などと呼んで蔑視し、とうとう日本と衝突する事態となった。

その頃、日本も大陸に向かっていて、利権を手放そうとはしなかったから、鬼畜米英というスローガンでもってアメリカを敵と位置づけた。両国関係には、はじめから心の中のボタンに掛け違いがあった。

現代の日本では、アメリカ文明が好きだという若者が圧倒的な比率を占めるが、同時に、年配の者の心の中には、何かというと反米感情が頭を擡げる。マルクス主義の煙を吸った世代にこの感が強いようだ。

近年、マッカーサーの占領政策に対して、割り引いた評価を行う傾向があるが、そうした反米感情の噴出の新しい姿の一つではないか。

西の方については、日本は、同じ南蛮といっても、スペインは別として、ポルトガルやオランダとの間には長い友好関係がある。日本人には古代から海の幸というもののへの信仰があり、これらの国々がはるか海を越えて「舶来の幸」をもたらしてくれるという感情がある。鉄砲や「ジャガタライも」（ジャガイモ）、カボチャ、トマト、トウガラシ等々や、医学を伝えてくれた国だということで、敵愾心よりも、好奇心と友好感情を懐くことになったのであろうか。

相手に好意を持てば、相手も好意で応える。嫌いと思えば相手も反感で応える。日頃から政府による外交とともに、多くの国民の平常心での民間交流が有効なのである。

心理学者は、人間というものは誰でもコンプレックスの塊をもっている、と教える。誤解されているよう

に、コンプレックスとは劣等感のことばかりではなく、いろいろな感情の複合のことだが、われわれ人間の集団には、「常に心の倉庫に、さまざまな無明というものを蓄え込む」という性質があるらしい。そのことを反省させるのも、歴史というものを学習することの効用ではないか。

歴史を学ぶことは、心の中に埃があることを知り、それを払って、真の本願を自覚することにあるのではないか。

歴史の事実というものは、やがておのずから自己の正体を露にするものである。一時、政治的に、どのように偽りの物語を作文しようとも、正体は暴かれる。先に述べたように、正体には素実と真実と心実という三実が重なり合っている。心実に埃を帯びた虚偽の歴史論は、やがて化けの皮を剥がされる。

中国の古典に、「天網恢恢粗にして漏らさず」という。それは、歴史編纂の場合でも的外れではないようだ。その意味で、科学が歴史の最も確実な方法となるべきなのである。歴史においては、なによりまず科学性と実証性を軽視してはなるまい。

歴史は、物言わぬ出来事の世界であり、またその記録の世界であり、広大な心実の世界でもある。人間の願いや自慢などの「幻想」、「エゴイズム」、あるいは「誇り」とか「自尊心」というようなものを、投げ入れ、あるいは投射することを許してくれる。

それだけに、歴史の物語においては、編集し物語る当の人物の人格が問われるのである。

歴史観は、こうした心実にかかわるが、歴史の教えるところでは、自尊傲慢で世に憚る歴史観も、過剰な自己卑下の態度に引きこもる自虐史観も、どちらも集団のいのちを伸ばすものではないようだ。

謙遜と正義と愛の精神に立った自律史観による者こそが、ひとり歴史の流れを生き抜く人物であろう。

自律史観では、いうまでもなく、自己のいのちを自衛するための、国防上、正当な自衛権を放棄するようなおめでたいことは認めない。天地自然から与えられた自分のいのちは自分で大事に衛る義務がある。

いわゆる「身を殺して仁をなす」ということは、集団の中の個人にはあり得るが、国民という集団全体には妥当しない。集団全体は身を殺してはならぬ。国民集団は——謙虚に——生き延びなくてはならない。集団の中のメンバーが身を殺して仁をなすのは、集団を生かすためなのである。

自律史観では、その上で、集団のいのちと力を、みだりに他を破壊することに使わない。相利共生か片利共生のためだけに使う。寄生は行わないし、捕食も避ける。善きものを自分に受け取るために努力するか、他に与えるために努力するか。われわれは、他に与えると自分が貧弱になり幸福でなくなると、心配する必要はない。歴史はこの真理を教える。

そして、われわれにとって、地球という生態系が根本の公共財である。何より生態系自体を維持することが必要であり、その枠のうちでしか、何人も、いかなる集団も、自己を主張できないし、してはならな

い。この基準に沿う者が永遠のいのちを得る。「柔和なる者が地を継ぐ」と教えられるが、柔和なる者は、こういう基準に従う者のことに外ならない。そのことが究極の国益となる。

われわれは、争いや競争を含みながらも、エコシステムの知恵を、歴史の形成に活用しなければならぬ。

* 著者永安幸正教授は、平成十九年（二〇〇七年）九月三日、六十六歳で逝去されました。本論考は先生のご遺作となりました。ここに謹しんで、御冥福を祈念申し上げます。